

日本の地域病院における ロボット支援根治的前立腺切除術後（RARP）の 術後尿失禁の期間と関連する因子についての検討

前立腺がんの診断数は年々増加傾向にあります。標準的な手術法である「ロボット支援根治的前立腺切除術（RARP）」は施行後に尿失禁を呈することがあります。尿失禁はその後の生活に大きな影響を及ぼします。患者さんは医師から術後の尿失禁について説明を受ける事でその後の生活のイメージがしやすくなります。医師からの説明が分かりやすいものにする為に、筆者は術後尿失禁の程度とその要因について調査しました。

この度、「公益財団法人ときわ会 常磐病院」では、RARP術後の尿失禁を呈する期間と関連する因子について論文にまとめ、スイスの学術出版社（MDPI）が発行する国際学術誌「International Journal of Environmental Research and Public Health」に掲載されました。

当院では、今後も患者さん一人ひとりに適した医療サービスを提供するため、学術研究も推進してまいります。

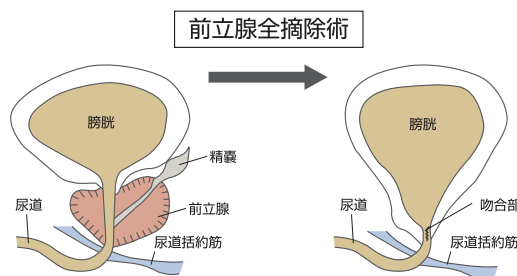
背景

- 前立腺がんは世界で3番目に多いがんで日本でも増加傾向にあります。主な治療手段は前立腺を摘除する手術であり、なかでもRARPは標準的な術式となります。
- RARP施行後に一時的に尿失禁を呈する場合があります。おおそ1年で90%が回復するとされていますが、地域病院の場合どの程度の期間で回復するかは明らかになっていません。



方法

- 2019年4月から2021年3月までに、当院でRARPを施行した209名を対象としました。
- まず、Kaplan-Meier法で尿失禁の回復期間を推定し、次にCox比例ハザード回帰モデルによって影響する因子を評価しました。



結果

- 患者の年齢中央値は71歳でした。
- 20人(9.6%)が術前から尿失禁があり、134名(64.1%)が経験豊富な医師によって手術され、骨盤内の神経温存は片側および両側でそれぞれ91名(45.7%)および11名(5.5%)の患者に施されました。
- 尿失禁回復率は術後より30日、90日、180日、365日で、それぞれ5.7%、23.4%、64.6%、93.3%でした。
- 術前の尿失禁、経験の浅い外科医による手術は尿失禁の回復を遅らせ、また神経温存は早期回復と有意に関連していました。

術後尿失禁持続時間に関する多変量解析
※ハザード値が大きいか、回復が早くなります

変数	多変量解析 (95%信頼区間)	p 値
術前の尿失禁	なし あり	Ref. 0.28 (0.14-0.57)
医師の経験	上級医 若手医	Ref. 0.61 (0.44-0.86)
神経温存	なし 片側温存 両側温存	Ref. 1.35 (0.97-1.87) 2.87 (1.43-5.77)

考 察

- 結果、一年間で93.3%の患者で尿失禁が回復し大学病院等と比べても遜色ない成績でした。一方、90日後の早期回復は23.4%と遅い傾向にありました。
- 若手医師による手術は尿失禁の回復を遅らせる可能性がある為、常磐病院ではダヴィンチのデュアルコンソールを導入し、上級医師がリアルタイムで監督し手術を行っています。

今後の展望

- 治療方針選択の際は、医師が患者へ十分な説明を施し術後尿失禁の理解を促した上で、その実施を奨めます。
- 理学療法士による骨盤底筋体操など術後尿失禁に対する外来でのサポート体制の構築や、若手医師の教育を通じた医師不足の解消に繋がっていきます。

- 論文タイトル Duration and influencing factors of postoperative urinary incontinence after robot-assisted radical prostatectomy in a Japanese community hospital : a single-center retrospective cohort study
- 学術雑誌 International Journal of Environmental Research and Public Health
- 論文著者 笠井唯史、阪野太郎、中村和貴、小内友紀子、茂田治樹、鈴木文雄、金田侑大、Divya Bhandari、村山安寿、高松克守、小林奈緒美、澤野豊明、西川佳孝、佐藤裕之、尾崎章彦、黒川友博、神崎憲雄、新村浩明
- 論文URL <https://www.mdpi.com/1660-4601/20/5/4085>

